**―シカの解体シーンはメッセージ的なものを伝えたくて入れたのでしょうか。**

**監督**　それも相談して入れたのですが、現代生活の中では自分が手を汚さなくてもお金を払えば肉や魚が食べられる。だけどその裏では誰かが手を汚しているということがあって、そういうことは普段の便利な生活をしていると、どうしても忘れがちになってしまいます。そういうことを、あのシーンをしっかりと見せることで、生々しい生（せい）というか、正直見たくない人もいると思いますし、不快な思いをする人もいるかもしれませんが、それでもそういうことを映画を通して伝えるということが大事なんじゃないかなと思って、もちろんそれもアイヌ精神の中に、ちゃんと感謝するというのがあるので、結果的にしっかりと見せるという判断をしました。

**重樹**　祖母は春になったら山菜を採りに行って、自分が食べるものは自分で採るという生活をしていました。そういうことを子どもの頃から見て育ってきて、それが自分の場合はサケだったり、シカだったりということなので、だから息子にもいろいろなものを見て、覚えてほしいなと思います。

**―第37回東京国際映画祭に参加されていかがでしたか。**

**監督**　東京国際映画祭もこうして一緒に舞台に立てて、そのときも「衣装を着て」とお願いしたわけではなく、シゲさんたちが自分で着ることを選んでくれました。この映画に込めている内容やメッセージもそうなんですが、映画を通して発言する機会ですとか、そういう場を設けられているというのがすごくうれしいです。

**―「アイヌモシリ」もそうですけれど、監督がアイヌを題材にドキュメンタリーで撮りたいと思う、かりたてられたきっかけは何だったのでしょうか。**

**監督**　まず自分がもっとちゃんとアイヌのことを知りたいというのが大きかったです。私は北海道の出身ですが全然アイヌのことを知らずに育ち、アメリカで長く生活している中でやっとそのことに気づきました。映画の歴史の中でみるとアイヌを題材にした映画は数少なく、いまだにそうですけれど、アイヌ役を和人が演じているということがあって、そういうものではない映画を作るということに意味があるのではないかと考えたのが最初でした。

**―実際に撮ってみて大きく自分の中で変わったこと、気付きみたいなものはありますか。**

**監督**　たぶん数えきれないくらいあると思いますが、それはアイヌ文化だからとか、アイヌの精神だからということよりも、人としてすごく魅力的だったり、すてきだったり、筋が通っていたりする人がたくさんいて、そういう人たちから教訓を得ました。許可もいまだにたくさん取らなければいけないし（マレプ漁など）、それは個人的にはおかしいんじゃないかと思うんですけど、そういうことを全くものともせず「好きなことができるならそれでいいよ」という感じで粛々とやっている、それが結果的に伝統文化の普及につながっているのがすてきだなと思って。自分も作る側の人間として「何かのために」とか、よく考えたり悩んだりするんですけど、こんなふうに、ただ真っすぐにやって、結果的に何かにつながっているというのは一番いい形だということを学ばされています。

**―「アイヌプリ」という一つのドキュメンタリー映画が完成して、出演者とも絆ができると、この先もずっと追いかけたくなりませんか。**

**監督**　実はですね、もう次回作があります。今年の春にシゲさんが念願のクマに遭遇して獲ったんです。シゲさんはクマを獲ったらアイヌプリ（アイヌ式）で「熊送りの儀式」をすると決めていたのですが、もう何十年もやられていないし、本当に大掛かりな儀式なので、今度はシゲさんから逆に「こういうことをやるんだけど、記録できないか」ということを相談されました。それで、急いで最小限のクルーと予算をかき集めて撮影しました。これから編集するのですが、そういうものがすでにあります。

**―最後に一言メッセージをお願いします。**

**重樹**　アイヌに対していまだに偏見を持っている人もいて、アイヌは普段からこういう着物を着て生活しているんじゃないかとか、狩猟採取のみで生活しているんじゃないかとか、そう思われていることがあるんですけど、アイヌも普通に皆さんと同じような生活をしていて、その中で自分たちでできる範囲でアイヌ文化を伝承していますので、この映画を通してそういうことを知ってもらう、考えてもらうきっかけになればいいなと思います。

**基輝**　ありがとうございました。

**監督**　いま、シゲさんが言った言葉を私も心から思っています。だけど、どうしてもアイヌの映画というと何か身構えて見なきゃいけないとか、そういうことがあるかもしれませんが、本当にフレンドリーで、オープンで、親しみやすい人たちの和やかな映画ですので、映画を見て良かったと思ってもらえたのなら、周りの人たちにも伝えていただけたらうれしいです。ありがとうございました。

## 「アイヌプリ」完成報告会

12月13日、映画の公開前日に白糠町役場で「アイヌプリ」の完成報告会が開かれ、福永壮志監督と主演で白糠アイヌ協会会長の天内重樹さん、棚野孝夫町長が出席しました。

報告会では棚野町長が「白糠をロケ地とした映画はシサムに続き２作品目。アイヌの方々が果たしてきた役割や文化をより一層知っていただく機会となるよう、また、地域の活性化につなげられるよう、できる限りの応援をしていきたい」、福永監督は「日常生活の中からにじみ出るアイヌ精神や文化が映画を通して伝われば うれしいです。シゲさんや家族、皆さんがすてきな人たちなので、そういう方々の人としての魅力を伝えたいという気持ちで映画を作りました。多くの人たちに見てほしいです」、天内さんは「マレプ漁や自然の中で生活をしたりなど、自分にとって何気ない生活は、先祖から受け継がれてきたものであり、それがこうして形として残り、いろんな人に広がっていくことがすごいことだなと思います。いろいろな意見はあるかと思いますが、アイヌに残る偏見が変わっていくようなきっかけの一つになればと願っています」と、それぞれ話していました。